

近畿本部（登録）防災研究会
第1回「防災講演会」のご案内
テーマ：東日本大震災からみる防災計画

近畿本部（登録）防災研究会の防災講演会を以下のとおり開催いたします。防災に関わる問題は、全ての技術部門の技術士にとって重要なテーマのひとつです。多くの方々のご参加をよろしくお願い致します。なお、まだ技術士会に入会していない方も参加することができます。

記

日時：平成26年9月24日（水）19:00～20:00
場所：日本技術士会近畿本部会議室
内容：「東日本大震災からみる防災計画」 今道 洋氏
参加費：500円（防災研究会会員は無料）
懇親会：講演会終了後、会場の近くで開催（会費3,000円程度）
申込み期限：平成26年9月20日（土）

近畿本部（登録）防災研究会 第1回「防災講演会」参加申込書

平成26年 月 日

氏名		防災研究会（会員、非会員）
懇親会	参加する	参加しない

防災研究会の会員以外
の方は以下も記載して
下さい。

技術士部門		技術士会（会員、非会員）
勤務先		
電話番号		
FAX番号		
メールアドレス		

【申込み先】公益社団法人日本技術士会近畿本部（登録）防災研究会

E-mail：minamigawa@etude.ocn.ne.jp

FAX：072-242-7179（担当幹事：南側晃一）

第1回「防災講演会」

「東日本大震災からみる防災計画」

復建技術コンサルタント(株) 今道 洋
技術士（上下水道部門）

【略歴】

1977年生。大阪府枚方市出身。2001年立命館大学大学院修了後、(株)中央復建コンサルタントに入社し、道路計画部門に所属。2004年枚方市役所入職。同所で下水道事業に関する計画・設計業務等に従事し2010年技術士（上下水道部門）を取得。

2011年、東日本大震災により被災を受けた東北地方の被害状況を目の当たりとし被災地の復興に尽力したい志を持って、翌2012年同所を退職、単身仙台に移住し、復建技術コンサルタント(株)に入社。主に被災地に関する復興事業に携わる。

復興事業では「女川町復興都市計画」、「松島自然の家災害復旧事業」等に従事。また、防災計画関連業務としては「岩手県葛巻町における自立分散型エネルギー供給体制構築業務」「岩手県広域防災拠点整備計画業務」等に従事した。2014年5月帰阪し、同社関西事務所にて勤務。現在に至る。



【講演概要】

東日本大震災においては、地震とそれ連動した巨大津波によって災害史上最悪の人的、経済的被害をもたらした。また、それは同時に自然災害の脅威から逃れるための防災技術、防災教育の重要性を改めて思い知ることとなった。私が仙台において業務に従事した復興事業、防災計画事業については、まさに被災地で行われたものであり、今後発生が危惧されている南海トラフ巨大地震をはじめとする自然災害への対策として非常に参考になりうるものである。

本講演では、東日本大震災の被害状況、復興状況をあらためて見直すとともに、各地で行われている様々な防災事業や防災計画について紹介し、今後の自然災害に向けた「防災」を考える時間としたい。

(32)「復興を見届けるまで」／コンサルタント会社主任技師・今道洋さん



市職員を辞め、大阪から仙台に来た今道さん。「津波被災地の復興を見届けたい」と語る＝宮城県女川町

古里を離れてでも被災地で働きたい。大阪府枚方市職員だった今道洋さん(35)はことし4月1日、こんな思いを抱いてレンタカーを運転して仙台に来た。市役所は3月末で辞めた。新しい仕事は決まっていなかった。家族に強く反対された。それでも自分の気持ちは抑えられなかった。転職サイトを利用し、6月に仙台市のコンサルタント会社に入社した。担当は宮城県女川町の復興事業。方言に戸惑いながらも、被災者からの聞き取り調査などに取り組む。

◎大阪の公務員生活捨て被災地勤め

＜帰宅は深夜に＞

「住民と直接対話できる仕事なのでやりがいがある。震災発生から1年半が過ぎたけど、しんどい人はまだまださ

んいる。力になりたい」

今道さんは日焼けした顔で語る。

仮設住宅で暮らす人に、今後の居住地の希望などを尋ねるヒアリング業務に携わる。面談中に泣き出す人。不安や悩みを抱えながらも前を向こうとする人。「こんなに大変なこともあるのか…」と思い知らされる毎日だ。

勤務する復建技術コンサルタント(青葉区錦町)から女川まで車で片道1時間半。朝は早い。帰宅が深夜になることも珍しくない。被災地と向き合う日々が続く。

東日本大震災の巨大地震が発生したとき、枚方市役所上下水道局庁舎にいた。所属する下水道整備課は2階。長周期の大きく不気味な揺れが続いた。静まりかえった職場に、ブラインドが窓を打ち付ける音が響いた。

阪神大震災のときは下から突き上げられる揺れだった。「遠くで大きな地震が発生したに違いない」。パソコンで情報を探す。東北地方の太平洋側を震源に巨大地震が発生し、沿岸部に大津波警報が出ていることを知った。

新聞は連日、震災で亡くなった人たちの名前と年齢などを伝えた。今道さんの長女は小学校の入学を控えていた。犠牲者の中に長女と同じ年齢の子どももいた。

ピカピカのランドセルはもう手元にあっただろう。机を買ってもらっていたかもしれない。高校や大学を卒業し、4月から人生の新しいステージに立つ人もいたはずだ。見知らぬ人たちの無念さが深く胸に刻まれた。

「被災地で働きたい」。ニュースを見るたびに、そう思い続けてきた。下水道整備課から被災自治体への派遣枠は2人。派遣を希望したが被災自治体から依頼はなかった。

「市役所を辞めて仙台に行く」

腹を決めたのは年明けだった。4人目の子どもを身ごもっていた妻の同意は得られなかった。両親にも強く反対された。

今道さんは大学で土木工学を学び、大学院に進学。修了後、大阪の建設コンサルタント会社を経て、2004年枚方市役所に入った。就職難の時代、公務員は人気職種だった。それでも決心は揺るがなかった。

何も決まっていなのに仙台に来たのは、大阪にいたままでは就職活動ができないと感じたからだ。企業の面接を受けようにも、東北は遠い。仙台を拠点にして復興に役立つ仕事を探そうと考えた。

女川に通って4カ月余り。水産加工工場や住宅が立ち並んでいた町中心部のがれきが、ようやく片付いた程度。住宅地や道路の整備など新たな基盤整備事業はこれからだ。

「何かと大変だけど、仙台に来ていなかったら将来後悔していたと思う。女川だけでなく、被災地の再生と復興を見届けたい」。口元には強い決意がにじんでいた。